

JASIS

NEWS

No. 60

2018/2/28

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

大会を振り返って

学会長 直井英雄（東京理科大学）

本年度の大会は北九州での開催でした。季節外れの台風との関係で、残念ながら天候には恵まれませんでした。例年通り、すべての行事を無事終了することができました。これも、大会関係者の皆様のご尽力のおかげと、深く感謝する次第です。特に、大会長を務めてくださった九州産業大学の上和田茂先生、実行委員長の九州女子大学 森永智年先生、副実行委員長の日本文理大学 近藤正一先生、実行委員の高橋先生、諫見先生、染原先生、それと、裏方として協力してくださった学生諸君、本当にありがとうございました。

さて、以下は、大会行事のそれぞれに参加した私の感想です。小学生の平凡な感想文みたいで恥ずかしいのですが、お許してください。

まず、見学会。今回は「TOTOミュージアム」と「旧蔵内邸」を見せていただきました。ご多分にもれず、前者では充実した衛生陶器の展示に圧倒され、後者では、近代和風の、どうだと言わんばかりの見事な造作の数々に、これまた圧倒されました。本物中の本物を見るのはかくも幸せなことかと、本年もまた、つくづく感じさせられました。

翌日の論文発表会も、とどこおりなく執り行われました。これに関連して、数年前から試行錯誤的に行ってきた学生対象の発表表彰ですが、本年は、西出和彦先生と松崎元先生のご尽力により、現行の条件のなかでは最適と思われる選考方法が試みられ、大変うまくいったと私は思いました。この表彰制度は、若手会員の大きな励み

となるものですので、来年以降も、このような形で続けていければと考えております。

卒業作品展とその中の優秀作品を表彰する制度も、インテリアを学ぶ若手を励まそうとする制度です。本学会でも長い歴史を持っておりますが、本年度は、河村容治先生の後を継いだ高月純子先生が取り仕切ってくださいました。

講演会は、九州大学の市原猛志先生による北九州の近代化遺産に関するお話でした。当日の天候を勘案して、やや短い講演時間をお願いすることとなってしまいましたが、迫力のある話しぶりに聞き入ってしまいました。

以上、本年も大変充実した、楽しい大会になったのではないかと思います。この大会を盛り上げてくださったご参加の方々すべてに、心からの謝意を表します。

■第29回日本インテリア学会大会（北九州）開催報告

副実行委員長 近藤正一（日本文理大学）

実行委員 高橋浩伸（熊本県立大学）

台風21号の接近で天候が心配される中、日本インテリア学会第29回大会（北九州）が、2017年10月21日（土）、22日（日）の両日で開催されました。

21日（土）午前中には、九州支部主催で本大会に合わせて実施した旧松本邸の見学会があり、午後には、TOTOミュージアムと旧蔵内邸等の見学会が開催されました。また19:00からは、小倉駅ビル内の小倉ステーションホテルにて研究交流懇親会が開催されるなど、会員の皆様との交流を深めることができました。

翌22日（日）には、九州女子大学（福岡県北九州市八

幡西区) 思静館 4階において、9:30より開会式が開催され、上和田茂大会委員長、直井英雄日本インテリア学会会長、森永智年大会実行委員長の挨拶があり、その後各会場に分かれ研究発表会が開催されました。またこの研究発表会と並行して、卒業設計展示が別会場で行われ、出品登録学校数45学校、当日展示作品53作品の出展があり、多くの方々の観覧が見られました。途中昼食をはさみ、12:10~13:10において理事会が開催され、その後午後の部の研究発表が行われ、活発な議論が交わされていました。14:50~16:00には、「明治日本の産業革命遺産」と北九州の産業遺産～八幡製鐵所関連資産を中心に～と題して市原氏(北九州市門司麦酒煉瓦館館長)による記念講演会が行われました。その後、閉会式および表彰式が執り行われ、ここでは、卒業設計展示に

対し、最優秀作品賞、優秀作品賞、奨励賞が選出され、また研究発表に対して、学生発表奨励賞の受賞がありました。受賞者名等は下記のようになりました。

日本インテリア学会 第24回卒業作品展

開催：2017年10月22日(日)

会場：九州女子大学 思静館4階

出品登録学校数45学校 当日展示作品数53作品

〈審査結果〉

【最優秀作品賞】(1点)

・犬の散歩にZ軸を

日本大学 工学部 建築学科

佐々木浩祐



開会式



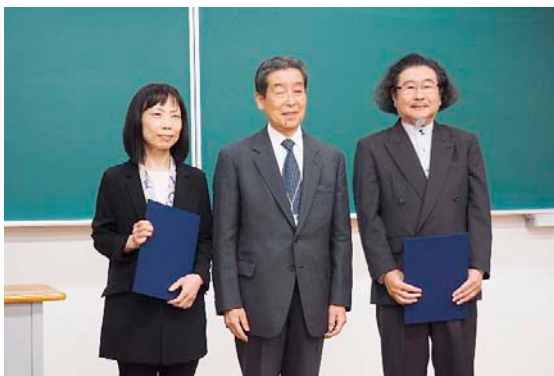
卒業設計展示



研究発表会



記念講演会の様子



名誉会員の称号授与



学生発表奨励賞の受賞者

【優秀作品賞】（3点）

- ・織りなす住処、紡ぐ居所
 桐山女学園大学 生活科学部 生活環境デザイン学科
 平 佳奈
- ・日本一 ビールに詳しくなるための図書コーナー
 名古屋芸術大学 デザイン学部 デザイン学科
 スペースデザインコース
 内田克憲
- ・Undefined
 学校法人環境造形学園 専門学校 ICSカレッジオブ
 アーツ インテリアデザイン科
 上原照屋、ダニロ直樹

【奨励賞】（1点）

- ・平田会館 屋外掲示板の制作
 千葉県立市川工業高等学校 インテリア科
 金杉彩夏、保科春日

〈審査員〉

直井英雄（日本インテリア学会 会長）
森永智年（第29回九州大会 大会実行委員長）
諫見康彦（第29回九州大会 大会実行委員）
金子裕行（日本インテリア学会 教育部会長）
高月純子（日本インテリア学会 表彰委員会）

本大会参加者数は100名（当日参加者5名）、発表件数56題と、皆様のご協力・ご理解のもとに円滑に開催できたものと思っております。大変有難うございました。

◆見学会

大会実行委員会と歴史部会の共催でTOTOミュージアムおよび旧藏内邸の見学会が行われました。参加者数は、42名でした。

小倉駅北側階段付近を13時に出発し、まずは北九州市街地を流れる紫川のほとりに建つTOTOミュージアムを訪ねました。TOTOミュージアムは、創立100周年記念事業として2015年に開設された企業の歴史を紹介するための施設です。設計は梓設計、施工は鹿島建設、展示は丹青社によるもので、これまでに数々の授賞を受けています。TOTOといえば、衛生陶器を中心に、ユニットバスルームやウォシュレットなど、日本における水まわりの文化を創造し続けてきた企業であることは疑う余地のないところですが、創業当時はむしろ磁食器の生産が中心であり当時の名品が現在も大切に収蔵されていました。また、これまでに開発された多数の衛生陶器の展示はもちろんのこと、建築空間・展示空間においても環境アイテム100と称してさまざまな工夫が詰め込まれ、健康や環境に対するひとかたならぬ思いが伝わりました。担当部長の加藤氏らに創業の精神やものづくりへの想いにつ

いて解説・案内していただき、質疑応答の後、お土産にトイレの形をした石けんをいただきました。

続いて南下して築上町に向かい、高速道路を經由してバスに揺られることおよそ1時間、明治時代から昭和前期まで福岡県筑豊地方を中心に炭鉱等を経営した藏内家三代の本家住宅である旧藏内邸を見学しました。邸宅は福岡県指定建造物に、庭園は国指定名勝に指定されており、庭に面して12畳間の大玄関、10畳2室続きの応接間、10畳の茶室、18畳2室続きの大広間などが配置されています。また、広さもさることながら、柱や床板には台湾檜、畳廊下の弓形天井には屋久杉等の高級材料がふんだんに使われており、浴室や脱衣場は石やタイル貼りで豪



企業説明



ウォシュレットの展示



TOTOミュージアム

華に仕上げられています。一方、欄間や襖の引手などの細工はとても繊細で、名古屋工業大学の河田先生により、当時の優れた技術について解説をいただきました。蔵内家により屋敷と一体として建設された周辺の神社や石橋なども良い状態で保存されています。帰り際に近所の子どもたちがいつまでも元気に手を振って見送ってくれたことが印象的でした。また、台風が接近するなかの雨模様でしたが、ほぼ傘を差すことなく見学会を終えることができたことは、幸甚でした。



旧蔵内邸外観



建具の細工説明の様子

◆研究交流懇親会

見学会に引き続き、小倉駅ビル内の小倉ステーションホテルにて19時より2時間にわたって研究交流懇親会が開催され、50名が参加しました。直井会長、森永実行委員長による歓迎挨拶の後、大会参加者による活発な研究交流が行われました。九州支部では会員数が少ないことから特別な催しをすることが難しいので、九州支部各会員の自己紹介を兼ねた活動をそれぞれ10分程度でPowerPointを用いて紹介しました。研究発表会ではあまり発表されることのない日常的な教育活動・研究活動・地域貢献活動など、それぞれの個性を活かした活動内容がまとめて紹介されました。その後も和やかな雰囲気で開催者間の親交を深めることができました。最後に、高橋先生による締めの挨拶をもって散会となりました。

■第29回日本インテリア学会大会 研究発表講評

論文発表部門

【住生活 I】 001~005

座長：松田奈緒子（大阪産業大学）

001（河崎、彌重、小林）は、住まいのこれからの家事空間のあり方を探るため、Webアンケートにより、父親の家事や育児の参加実態を把握しようと試みる調査研究である。煩雑で膨大な家事内容を仔細に挙げ、それぞれの実施頻度を丁寧に掘り上げている。その結果、若い世代の父親ほど家事や育児への実施率が高く、参加姿勢も積極的であることを導き出した。

002（彌重、河崎、小林）は、001の続編で、父親はメンテナンス、クルマ、DIY、デジ家事が得意な傾向を浮かび上がらせた。会場からは、001と合わせて、父親の家事実態への住宅の規模や形態による影響、年収の影響、共働きと片働きとの相違に対する質問、あるいは、父親と母親の双方の意見聴取に対する希望等、さらなる分析を求める声が多数上がり、関心や期待の高さが窺えた。

003（木戸、河合）は、夫婦2人のみの共働き世帯の多くが賃貸集合住宅を暮らしの基盤にしている点に着目し、彼らの住まいへの要件を追求している。共働き夫婦の暮らしの特性として平日は夕食を共にし、休日は互いのしたい事を尊重する傾向のあることをWeb調査から明らかにした。その上で、つかず離れずの距離感を大切にしたい賃貸集合住宅のプランを提案。今の時代を反映するこのプランのもたらす効果や影響についても、今後の検証が待たれる。

004（下川）は、食事の支度にまつわる意識に変化が生じている現状に着目し、食卓風景から住空間計画の方向性を見出そうとする基礎研究である。戸建住宅に住む既婚女性を対象にWebアンケート・写真調査を実施し、2軸4分類を導き出し、詳細に意識傾向を捉えている。食事の支度に「いつも手をかけたい」人は、家族関係を大切に、家族が集まる空間を重視する傾向を把握する等、今後の展開が期待される研究である。

005（沢辺、河崎、竹川）は、生活が簡便化していく一方で、「ていねいな暮らし」への憧れを持つ人も多いと推測し、2,000人を対象にWebアンケート調査を実施した。男女問わず8割以上の方が丁寧に暮らしたい意識を持っていることを明らかにし、さらに具体的な暮らしの実施状況を、今回は主に食事について、男女別、年代別、家族形態別に導き出した。今後、どのような住まいの提案に繋がっていくのか期待が高まる一報である。

【住生活Ⅱ】 006～009

座長：木戸将人（旭化成ホームズ 暮らしノベーション研究所）

006 自分の意向が住宅の共用空間にどの位、反映されていると感じているのか「空間の自己化率」という言葉を用い、共有空間の自己化率と住み手の意識との関係を子どものいない既婚者を対象にアンケート調査を行い、明らかにしようとした継続研究である。自己化率を男女別に分析し、夫婦の意識・関係性から自己の変容を7つにモデル化され、興味深い発表であった。今後、7つのモデルの分布割合に関する分析に期待したい。

007 住要求の変化への対応が住宅の長期利用を実現する要件の1つと捉え、築年数がかなり経つカリフォルニア州郊外戸建て住宅の図面から、公室の住要求の変化への対応実態を探った研究である。年代で流行の間取りの出現を調査により捉え、ダイニング1ヶ所は50年代以降に出現したこと、ファミリールームは60年代以降に出現し、かつ延べ面積が影響したこと等が報告された。今後、更なる継続研究の発表が期待される。

008 中国の大都市中規模集合住宅をいかに高度空間利用できるかについて生活動線の数量化からみる分析手法を用い、改造前後の間取りの特徴を探り、課題を明らかにした研究である。住要求の調査から子ども部屋は独立した個室を求める傾向があり、2LDKから3LDKに改造した間取りではパブリックとプライベートのゾーニングが曖昧で空間にまとまり感がなくなることが課題とされた。今後、課題に対する改善策の発表を期待したい。

009 大学生が祖父母から得た影響とその評価について記述を分析することで明らかにした研究である。祖父母との居住距離が近いほど祖父母からの影響が強いものと、イベント的な家族の集まりで、居住距離による影響が大きく違わないものがあること、また将来、自分の親との居住距離の希望に少なからず影響があること等が発表された。今後、学生の対象数を増やし、祖父・祖母から受けた影響に特徴があるのか探った発表が期待される。

【住生活Ⅲ】 010～013

座長：高橋正樹（文化学園大学）

010 本研究は、内壁の空き空間の幅に対し生活用品がどれだけ収納できるかについて実証的に検討したものである。有効幅805mmの実寸において、収納物の置かれ方や固定金具の有無等を考慮しつつ、収納量について観察し収納するための条件について明らかにしている。実寸模型を作成し子ども靴など様々な生活用品に関して検討した結果、単行本なら約40冊、大皿なら3皿、マグカップなら9個等の収納が可能という知見を得た。玄関、居間、食堂など用途別に収納されるものを想定しており、これによって溢れかえる生活用品から解放され、新たに収納家具を購入する必要もなく、それによって室空間が

狭くなることも無いとしている。今後は縦方向に積み上げるための収納ボックスのデザインにつなげるとのことであるので期待したい。

011 本研究の目的は、調査対象者と調査主体が相互にコミュニケーションのとれる方法としてオンラインコミュニティ調査を実施し、掃除道具の収納方法の実態や意向について明らかにすることである。ロボット掃除機などの充電が必要なものは、収納内にコンセントが無い場合に出しっぱなしとなっていたり、子どもの食べこぼしの掃除用として家具の隙間にほうきやちりとりを立て掛けていたり等、踏み込んだ生活内容にまで言及している。ウェブ上での回答のため写真を併用して回答でき、調査主体が状況を直接把握できる手法が有効に機能している。

012 未発表

013 本研究の目的は、多様化する畳と畳空間の実態を把握した上で、畳店がそれらをどのように評価しているのか、また今後の畳と畳空間がどのように変わっていくのか明らかにすることである。全国の畳店に対するアンケート調査を実施し275部（全体票）の回収を得た。畳店の社員数は1～4人が最も多く7割を占め、畳製作者の人数も1店舗当たり1～3人が8割であり小規模店舗が多いことがわかった。畳を納品している施設は住宅が最も多く、寺・神社、飲食店と続いた。また7割近い店舗が畳以外の取扱いをしており、障子、襖、網戸等があげられた。畳空間のコーディネート提案は、5割の店舗で行っていた。他の調査結果を踏まえ、畳店が畳を存続させ広めようとしている様子が伺えたとしている。畳だけでなく畳空間全体のコーディネートを行う方向に展開していくことが予想され、畳店自身にしっかりと知識と考え方を持つことが求められると筆者は結んでいる。

【各種施設】 014～018

座長：橋本都子（千葉工業大学）

014 「病棟における食堂の利用状況と整備状況に関する調査研究」（江川）：これまであまり重視されてこなかった入院生活における食事の環境に着目して、ヒアリング・アンケート調査より施設利用者に望まれる整備内容を整理した研究である。その結果、一般病棟に比べて療養病棟や回復期リハビリ病棟では整備が求められていることが把握された。入院患者にとっての食事は楽しみの一つであり、その環境を整えることは早期に健康を取り戻すためにも重要なことだと考えられる。本研究の継続と今後の発展が期待される。

015 「カナダ・トロントバースセンターにみる助産師活用に向けた空間計画の事例について」（西山、遠藤、松本、陳、鈴木）：院内助産システムにおける空間の特性に関する研究その7として発表された。今回の発表で

は、カナダにおける助産師を活用するための空間の計画事例について、トロントバースセンターの視察結果を中心に我が国との違いに視点を置いて報告された。検診室、バースルーム、家族室などの事例報告が写真とともに詳細に行われ、妊産婦の居住性を向上した事例や、付き添い家族の居住性や交流を重視した空間計画、大きな開口部のある開放的な空間計画など、我が国でも参考になる事項が多く報告された。

016「大分空港の施設改善に関する研究」(近藤)：大分空港ターミナルの搭乗待合室におけるベンチの並びを調査して、改善案を示して試行的に社会実験を行って、改善効果を検証した研究である。提案前の空席状況より、4人掛けベンチの中央2座席を荷物台に変更、またベンチの並びを変更した結果、座席の利用率が向上する結果となったことが報告された。出発便モニターの見やすさと利用されるベンチの関係、身障者への対応などについての質問があった。他空港への適用など、本研究成果の今後の発展が期待される。

017「岐阜県における木造校舎の基礎的研究」(清水)：岐阜県に現存する廃校となった木造の小学校校舎29校を対象に、建築調査とヒアリング調査を行い木造校舎の平面構成や立面意匠など建築的特徴を把握して報告する研究である。いまだ未確認・未調査の現存校舎が存在する可能性もあり、調査を進める中で取り壊される事例も発生していることがあわせて報告された。木造校舎の空間・地域特性をふまえた利活用のための方策も含めて、更なる研究の継続が望まれる。

018「ライフスタイル提案型ストアに関する研究」(小玉、ペリー)：都市部を中心に増加している国内のライフスタイル提案型ストアに着目して、流行の背景と空間デザインに関する現状把握を文献調査より行った発表である。飲食を提案する空間を併せ持つ4店舗を抽出して、店舗の構成、演出装置、配置・動線計画、付加価値などの項目で比較検討を行い、より詳細な空間デザインの考察を進めている。その結果、心地よさの演出、空間や素材による連続性の演出、入店を促す仕掛けなど具体的な要素が指摘された。インターネットが普及してリアルな店舗を持つ意味が問われている現代において、価値観の変化と空間デザインの関わりに着目した興味深い研究である。

【教育環境】 019～023

座長：早野由美恵(東北芸術工科大学)

019(上野)は保育所計画課題に関する基礎研究として認可保育所の計画上求められる課題を明らかにし、その解決の方法を提案するための研究の報告であった。関係者から・安全面・使いやすさ・近隣、環境配慮に関してのヒアリングを行い課題の抽出を行なった。多かった意

見は所要室や園庭面積に関する事項、保育環境、バックサービス、また安全性や経路等にも及んだ。それらの分析を行い、今後の展望として、支援技術の見直しや使われ方の研究、バリアフリーニーズへ検証の必要性が報告された。発表後、避難としての階段に関する質問があり、園児の避難時における階段の利用等からの回答がなされた。待機児解消のための保育所の整備が急務となっている近年である。今後の研究を期待する。

020(渡邊、上野、橋本)は特別な教育支援を必要とする児童を対象として、オープン型小学校2校(A校、B校)において小空間を実際に設置し、その使われ方や要望の調査を行なった。支援を要する児童の障害はそれぞれ異なり、小空間の使用手法もA校の児童は休憩場所やクールダウンとして、B校の児童は自分の居場所、騒がしい環境からの避難場所であった。求められる機能もA校は視界の遮断、B校は遮音性、遮蔽性の高さが求められた。小空間の大きさに関しても、学校から望ましい寸法の要望があった。今後も個々の支援児の特性、使われ方に応じた小空間の条件や実現方法を検討、継続していくということであった。

021(橋本、渡邊、上野)は増加の傾向にある通常学級に在籍する支援児童の、教室における彼らの落ち着いて過ごせる小スペース(居場所)の必要性から、実際に教室付近に場をつくり、観察調査や教師へのヒアリングを行い、そこに求められる条件や要素を明らかにしていった。調査対象は千葉県の小学校である。プロセスは調査、観察ヒアリング、試作を繰り返し行なった。結果として支援児童の逃げ場としてや、友人と過ごす場所となり長時間の着席が難しく教室の外へ出て行く回数が減り、落ち着く場所となっているという報告があった。このような空間を必要としている教育現場のためにも、今後の研究にも期待したい。尚、発表後の質問として文部科学省からの指針の有無についてなされた。

022(陳、高橋)は、台北の子供の外遊び場に関する研究報告であった。子供が外で遊ばなくなっている現状の中、体力や気力の低下を懸念し子供たちに外遊びを促すために、魅力ある遊び場とは何か、また心身への影響への要素を調査するため、6つの台北の遊び場において、写真を用いたアンケートを建築やランドスケープの専門家と非専門家に対して行なった。そこから得られた高い評価点の遊び場は・開放感がある・広い・カラフル・多様な遊具の設置されている遊び場であった。また、心身への影響としては高低差のある上下に全身が動く場合に評価が高く、城のような遊具の場合は子供のストーリー性等の想像力を育むとのことであった。巨大な遊具のある遊び場は長い時間の滞在には適しているが、環境との融合を疑問視する意見もあったと報告された。

023(高橋、平田)は昨今の状況から事業所内保育が注目

されていることを踏まえ、そこを利用する園児と保育士以外の大人との係わりについての調査報告であった。調査は広島市内の立地、職種を調べ、4つの施設において、園長先生または事業の担当者の方へのインタビューをおこなった。施設における園児と大人との係わりは、安全性を配慮して門への施錠や扉の透視度を低くする。保育所のエントランスが広い場合の他の親との係わり。同じ建物内にあった場合の事業所職員との係わりの共同空間。福祉系事業所内保育園では、園児と施設利用者が共に体操をして関わる企画の存在。などがあることが分かった。一方各所様々な問題点も存在し、それぞれの解決策も模索されており、今後は各接点の緩衝帯についてのアンケート等を実施してくという報告であった。発表後に、計画の段階として時期について、また、敷地内における別棟で存在している際の問題点等の質問があった。

【教育】 024～028

座長：清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）

024 長野県須坂市にある古民家を対象として、教員と学生が数日間滞在しながら改修やワークショップを実施する実践型のものづくり教育、その教育効果に関する報告である。2009年度から長期に渡り継続する中で、地域住民の理解や提案を得られるようになったこと、大学からの参加者にリピーターや卒業生も混ざるなど、年度ごとの単発的な関係ではなく、地域と繋がる体制が整ってきたことが報告された。安全面等への配慮を問う質問に対しては、事前打ち合わせの実施や多分野から複数（5～6名）の教員が引率する等の対策が紹介された。今後のさらなる活動の発展が期待される。

025 昨年度の大会で発表された、デザイン思考を用いたインテリア教育の可能性に関する研究の第2報である。今年度は、岩手県花巻市にある旧橋本邸の活用方法と空間デザインを検討するワークショップを対象として、その中で実践的に把握された効果の検証について報告された。現状理解・課題発見・発想・共有・振り返りと、デザイン思考を活用した5つの活動を繰り返すことで、ワークショップ参加者から最終的に出された提案は、建物管理者の思い描いていた方向性と合致しており、デザイン思考を教育に用いること、実際のデザイン教育における演習やワークショップの一部に取り入れることが有効であるとの認識が示された。

026 本報告は大学におけるインテリアデザイン教育のカリキュラムや課題製作のプロセスについて、発表者が勤務する神戸女子大学家政学部家政学科における実態を紹介、評価するものである。前半は学科のポリシー、学生の志向に応じたコース設定、プロフェッショナル養成のための演習への実践的な機器導入や資格取得のサポート等、2011年度から充実を図ったカリキュラム作成の背景

が示され、後半は実習・演習系講義の詳細な実施概要と学生作品の活用（学内イベントでの展示や学外コンペへの応募等）について明らかとされた。質疑に対する回答の中で、多種多様な演習内容を効果的に実施するためのポイントとして、教員の連携、学生の習熟レベルの確認が重要であるとの指摘が示されたことを付記しておく。

027 つくばエクスプレス・みらい平駅の開業に伴う、周辺の戸建て住宅・マンションの建設により、合併後の10年間で人口が1万人増加したつくばみらい市における住環境と小学生の習い事に関する研究である。市立の全小学校11校の児童を対象にアンケート調査を行い、発展する市の中心部における新しい教育環境や習い事への利便性と、過疎化が進む既存の農村地域における豊かな自然環境での学びや遊びの現状を把握し、双方の利点を市の活性化へつなげることを目的としている。本報では住環境（住宅の種類、間取り）と習い事（学習系、運動系、芸術系）について、学年および性差について具体的なデータを基にした考察が示され、中心部に新設された小学校の方が高学年での学習系の習い事の割合が既存校よりも10～20%高いこと等が明らかとされた。

028 027の発表と連携した一連の研究である。本報では旧来の周辺農村地域における小学校と新興住宅地に新設された小学校に通う児童の、自宅での学習環境を比較することでそれぞれの特徴を把握し、今後の小学校の統廃合やオープン型教室での教育実施を検討する際の資料を得ることを目的としている。027と同様につくばみらい市立の全11小学校の児童を対象としたアンケート結果による考察は、興味深い知見が示されていると一定の評価ができる。農村地域の既存校（A～J）と新設校（K）を二分して分析する前にまずはA～K各校ごとに分析した方がよいこと、保護者の職業による要因も大きいと考えられること等、質疑において指摘された点も考慮し、また学年進行に伴う変化や住宅のインテリア環境等、様々な視点も含めて分析することで、今後のさらなる発展が期待される。

【歴史】 029～033

座長：藤原美樹（福山大学）

029 甲子園ホテルの宴会場における空間構成と装飾の関係 一天井周辺の形状と打出の小槌をモチーフとした装飾に着目して－ 黒田智子（武庫川女子大学）

甲子園ホテルは、フランク・ロイド・ライトの愛弟子・遠藤新（1889-1951年）により設計され、1930（昭和5）年に開業された。この建築物のディテールは、日華石やタイルなどによるレリーフ表現がされ、ライト的な幾何学文様から、打出の小槌や市松格子などの日本的意匠まで、多様なディテールがみえる。本稿は、西翼1階の宴会場の内部空間を対象に「打出の小槌」をモチー

フに着目し、それらが視線の導く際の相乗的な効果について考察される。モチーフの特徴の表現の整理がされ、建築の構成材とのかかわりについて言及され、一定の成果が確認できる。今後の調査検証の進展が期待される。

030 近代建築におけるステンドグラス —大和田銀行敦賀本店・三井銀行福岡支店・山本家住宅（姫路市）— 金田美世（ステンドグラス工房我羅）・清水隆宏・河田克博
明治後期から昭和まで、日本近代建築におけるステンド制作で活躍した木内真太郎の業績に関する研究である。
本稿は、大和田銀行敦賀支店、三井銀行福岡支店、そして山本家住宅について、木内家の資料等の検証により、調査考察されたものである。

大和田銀行敦賀支店は、現在はステンドグラスの設置はないが、木内家の資料には図版が所蔵される。その資料では、木内の筆跡も確認され、詳細に調査が実施されている。また、三井銀行福岡支店は、同様に資料を丹念に調査されている。山本家については、今後調査が行われる予定とされ、今後の調査検証の進展が期待される。

031 ヨーゼフ・フランクの『象徴としての建築』に見る「万物の尺度としての人間」—ヨーゼフ・フランクの思考と建築作品—八代美智子（名古屋造形大学 名誉教授）
本稿は、ヨーゼフ・フランクの『象徴としての建築』を丹念に読み解き、書に示されるキーワード（単純な形態）、〈有機的表現〉に焦点をあて、フランクの建築作品と対比し分析を試みている。建築作品として、「ヴィラ・クラソン」「ヴィラ・セツ」「ヴィラ・ウェツェ」に焦点をあて、それぞれの特徴がまとめられる。何れも室内は動的で外側へ解放され光と空気に満ちた構成との考察である。今回のまとめとして、「万物の尺度としての人間」の思考が建築作品のベースであったことが述べられ、成果が確認できる。今後の研究の進展が期待される。

032 モーザーとホフマンの協働による住宅の空間デザイン [II] —「ウィーン工房」設立以後の住宅における文様と色彩〈1〉— 川崎弘美（川崎ブランドデザイン）
本稿は、コロマン・モーザーとヨゼフ・ホフマンの協働作品について、「E. マルクホーフ邸」「H. ラディスラウス&M. レイミー邸」「B. ゼーヴェルト邸」の3件の住宅について分析したものである。文様と色彩について整理され、特に文様については、無機的な文様と有機的な文様に細かく分析されている。これにより、ウィーン工房以前の文様の特徴として、線と格子が多用されたことが明らかにされている。ホフマンのみが採用していた台形の文様を、工房以降はモーザーが家具に採用していたという新しい知見が述べられる。今後の研究の進展が期待される。

033 スペイン・カタルーニャのロマネスク教会（その1） アラン谷のロマネスク教会（その1）高橋敏郎（愛知淑徳大学）

本稿は、スペイン・カタルーニャ州のロマネスク教会についての調査結果である。アラン谷のロマネスク教会の建築的研究はなく、新しい試みである。カタルーニャ地方はスペイン北部、ピレネー山脈を挟んでフランスと国境を接し、スラムや地中海文明との接触を経て、ロマネスクも独自の発展を遂げた土地である。アラン谷は、カタルーニャ州の北西端に位置し、フランスと国境を接している。サント・エウラリア聖堂の2014年、2016年に実施された調査により、内部の構成、様式、壁画、装飾意匠について明らかにしている。実地調査の結果が非常に細かく整理され、今後の調査が期待される。

【インテリアエレメント】 034~038

座長：黒田智子（武庫川女子大学）

034 「20世紀初頭の家具の名作の復刻の手法の開発—ブルーノ・タウト緑の椅子の復刻プロジェクト」（鈴木（雄）、岩生、武井、ト、西澤、篠塚、千賀、鈴木（敏））は、タウトによる「緑の椅子」を、3次元スキャン、モデリング、NC工作機械などを用いて完全復刻する産学連携の試みである。職人の高い技術による名作家具の復刻は、技術を継承する人材の不足や価格的な問題から困難さが増している。先端技術を得意とするデザイン系企業はもとより、家具職人を交えての検討は、機械と人の経験値の新たな補完的関係の模索として注目される。

035 「生活改善を試みた西村伊作の家具設計に関する研究4—富本憲吉との交流を通して」（藤原）は、生活実践はもちろん設計、芸術、教育など多角的な活動から生活改善運動を牽引した西村伊作の家具設計に着目し、陶芸家富本憲吉との交流による影響関係を考察している。背景として、住宅や生活用具の実用的な美しさから教育のあり方にまで視野を広げ、制作理念と方法から生き方そのものまで比較対照を試みている。必然的にウィリアム・モリスや民藝運動の思想、創作者としての獨創性などへ検証にも向かっており、展開が期待される。

036 「建築家山田守によるキッチン設計—山田守自邸を中心に（その2）」（大宮司）は、現存する山田の自邸について、台所とユーティリティを中心に考察している。短い家事動線、水切り・採光の工夫、収納の量と方法、食事スペースとの繋がり、アイロン台の収納など、随所にみられる使いやすさを重視した工夫が紹介された。それらは、自邸の設計を遡る約30年前、フランクフルトのジードルンクを見学した際のキッチンのデザインを元に行っていると考えられるという。山田の住宅作品は少数であることも起因してか、活発な質疑があった。

037 「住宅インテリアエレメントの提案・決定プロセスにおける建築家の施主との関わり方」（茂木、松本）は、施主の細やかな住要求に応じていると考えられる建築家の設計プロセスが、外から見えにくい事実を問題意識と

する。首都圏で設計事務所を開設、住宅設計実績のある建築家に対して、施主へのインテリアエレメントの提案・決定についてインタビュー調査を行っている。施主に対する「ショールームへの同行」、「持ち込み家具」に対する考え方を切り口に、施主を啓蒙するタイプから、その意向を極力受容するタイプまで4つに分類している。

038 「インテリアデザインに於けるIoT (Internet of Things) に関する考察」(井上、中村) は、IoTつまり、あらゆる製品(モノ)に無線通信機能を付した製品の動作・制御が、近年ビッグデータをもたらし、新たな製品開発・サービス向上に活用されていることに着目する。インテリアデザインにおけるIoTの製品、さらにプラットフォーム(OS、アプリケーション)、空間知能化(車内の温度管理、目的地設定による自動走行など)について考察している。ビジネスやサービスから、いわゆる空間まで横断的、学際的な取組みを志向した試論である。

【地域・コミュニティ】 039~043

座長：上野弘義(スターツCAM)

039は、東広島市福富町における中山間地域の空き家古民家を活用について、地域の魅力と課題より検討を行った報告である。活用法を検討する住民ワークショップから得られた提案は、地域の特性を示す施設との連携ができ、今後も地域課題解決の足がかりとして期待される。

040は、アパレル店舗のエントランスファサードの空間構成を類型化し、評価グリッド法により、魅力のある店舗の要素について検証を行ったものである。発表の場では、実空間をモデル化できる可能性や、色彩や照明計画への言及など、今後の発展について活発な意見交換の場となった。

041は、戸建住宅の庭をディスプレイ空間と捉え、事例研究を行ったものである。庭主が外部空間を生活に取り込んだ豊かな生活が示されるなど、オープンガーデンを通して地域の課題解決への展開が期待される報告であった。

042は、美濃手漉き和紙をめぐる地元産原材料の再生や、和紙製造を支える職人や地元の取り組みについて研究を行ったものである。今後、インテリア建材や工芸品としての伝統を守る上で、共通の課題となるであろう材料と担い手をいかに守るか、問題提起を含め有意義な報告であった。

043は、昨今の研究が手法の検討に捉われず、研究の目的・意義やその前後にあるものを深読みされているか、研究の根本を改めて考えさせられる発表であった。「進歩」が「より良い」環境を生み出すとは限らない事を理解しながら、我々が本質を正確に捉えた研究を行う為には、何が必要かを考える上で、有意義な発表の場となった。

【人間工学】 044~048

座長：茂木弥生子(駒沢女子大学)

044 「水回り設備・空間の人間工学に関する一考察」は、これまでの水回り設備の人間工学実験・研究について総括し、考察したものである。水回り設備や空間に関する文献や既往研究などについて、その歴史的な背景や経緯などが詳細に報告された。水回り設備機器の開発において、人間工学に関する実験・研究の果たす役割の重要性が改めて示された。今後も人間工学に基づいた実験・研究から、水回り設備や空間の開発や再検討が活性化していくことが期待される。

045 「インテリア空間のユニバーサルデザインの推移の考察」は、住まいのインテリア空間におけるユニバーサルデザインがどのように推移してきているかについて考察したものである。住まいの玄関、トイレ、ドアノブ、手摺り、蛇口について、ユニバーサルデザインの視点から調査した実態が報告された。トイレの洋式化や機能性向上により、本来のマナーや和式の使い方などを学ぶ機会が失われており、学校だけでなく家庭での教育も必要なのではないかとの意見が会場よりあった。

046 「入浴形態が疲労回復効果・睡眠の質向上効果に与える影響」は、整流吐水を用いた入浴による疲労回復効果や睡眠の質向上効果を壁掛け式のハンドシャワーでの入浴との比較において明らかにしている。成人男性7名を対象に実験を行い、疲労の評価は自覚的ストレス、意欲、爽快感、快適さ、認知機能についていずれも整流吐水のほうが優れた効果を示していること、睡眠の質の評価は翌日の覚醒や睡眠因子について整流吐水のほうが優れており、入浴後の深部体温の低下も整流吐水のほうが顕著であることが報告された。身体にあたる湯量や面積についての質問が会場からあり、入浴時の環境や時間による分析なども期待される。

047 「住宅内における身体活動量と座位行動の実態」は、住宅内での身体活動や座位行動時間について、外出時との比較から実態を考察している。40~50代の女性20名を対象に一週間の身体活動量計による連続測定調査を実施し、覚醒時における身体活動や座位行動時間、在宅時と外出時の比較などについての分析から在宅時の座位行動割合が高いことなどが報告された。身体活動量は住宅の間取りや家具レイアウトなどの影響も大きいと考えられるので、その関係性の分析も期待される。

048 「若い女性のかわいいインテリアへの評価構造について」は、若い女性に「かわいい」と評価されるインテリア空間について、その評価構造を分析し、考察している。評価を高める項目を評価構造図として整理したうえで、共起ネットワークを重ね合わせ、「かわいい」インテリア空間を詳細に分析している。「かわいい」と評価されない空間にはどのような評価軸が存在するのか、そ

の比較分析などが行われることにより「かわいい」インテリア空間の定義がより明確化されるのではないかと期待される。

【室内環境】 049～053

座長：江川香奈（東京電機大学）

049 「住まいの絵本に見る暮らしの中の音の分析」は、絵本に描かれている生活音をシーンとして捉えて特徴ごとに分類している。インテリア環境としては「モノ・空間に働きかける音」の分類が大きく関連するが、住の文化、住まい方と音のシーンが密接に関係していることが分かり、大変興味深い内容であった。調査対象事例数が多いので、集計や分析を行うことで、統計的な結果や知見が得られると考えられる。

050 「インテリアのカラーコーディネートに適応した色相環の提案」は、木造建築や日本のインテリアデザインで多く用いられる「茶色」をインテリアの5基本色とした色相環を提案した。また、茶色を基本色としたインテリアのカラーコーディネートを示した。茶色を基本色とすることの有効性ととも、その影響を詳細に把握することも、この色相環の発展につながると考えられた。

051 「日本の素材・技術を活用した照明の開発」は、これまで筆者が開発してきた素材を活用し、日本の素材や技術を取り入れ、住宅インテリアの質的向上を目指した照明器具を提案している。海外でのインタビュー調査の結果から軽量化などの課題が挙げられ、国内の評価も考慮し改良が予定されている。今後の評価と改良の過程の報告が期待される。

052 「オフィスでのトイレ利用実態調査について」は、現代のトイレ利用実態をセンサによる扉の開閉状況から詳細に分析し、明らかにしている。居住面積に対する各部屋の収納面積の増加についての分析と収納リフォームに対する具体的な提案事例を紹介している。本発表では2施設の比較分析であったが、今後のトイレブース数算出のための指標の基礎となりうる内容であった。

053 「環境実験のための模擬家屋の製作と活用」は、リサイクルできる材料を有効に、床暖房パネルとして活用するための実験調査の報告である。結果としてウッドセラミックスを用いた実験調査により、大きな省エネ効果があることが検証されたが、低コストが望まれた。詳細にデータを蓄積し、多角的に従来品と比較することで、効果的な側面と改良が必要な点を明確に分析している。

パネル発表部門

【設計提案】 054～056

座長：高橋未樹子（コマニー）

054 外の気配を表出する疑似窓の提案 窓がない部屋において閉鎖感を解消する疑似窓の提案である。本提案

の疑似窓の特徴は、額縁の中に入れた人工植物の枝葉を振動装置で僅かに揺らすこと、時間帯や天気に合わせて額縁内のLED照明の色を変更できることである。この照明の変更はスマホからも可能である。会場からは、枝葉の揺れに合わせて自然な音を発生させるアイデアなども出て、卒業までに更なるブラッシュアップが期待される。

055 リビングダイニングにおける収納の研究開発 近年、住宅の小規模化が進む中、リビングダイニング（LD）における収納は快適な生活を送る上で非常に重要である。今回の研究は446世帯にWeb調査を行い、LDに置かれる物品などを調査し、新たなLD収納を提案している。調査によるとLDに置かれるものは、かさばる物や細々したものなど多種多様であるため、1帖壁4面の空間に、奥行150mmと300mmの収納スペースなどを設けることでそれに対応する。モデルルームでの展示など、お客様からの評価は上々とのこと。

056 震災後の「コミュニティづくり」の提案 強度があり、耐久性が高く、積み上げも可能、切断可能、移動可能、入手簡単、安価なコンテナを活用した災害時の簡易住宅、仮設住宅の提案である。災害時は小学校体育館に避難することも多いが、農畜産業に従事するなど場合によっては避難できないこともある。また、体育館に避難したとしても一刻も早い生活再建が求められる中、住環境は非常に重要である。そのような状況においてコンテナハウスならではのスピーディーな設置、また今回は被災時にもなるべく快適な日常生活が送れるように、居住性能や意匠性にもこだわっていることがポイントである。

■平成29年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

今年度の大会は、10月21日～22日の期間に九州女子大学で開催され、無事終了いたしました。九州支部の皆様には大変お世話になりました。御礼を申し上げます。

大会時に開催しております理事会は22日（日）の12時より開催致しました。まず、名誉会員の称号授与につきましてご報告いたします。本年度総会において承認されました河村容治氏、栗山正也氏、小宮容一氏、谷口汎邦氏、長田洋子氏の5名の正会員にお送りいたしました。また、次年度において学会創立30周年を迎えるにあたり、論文集のアーカイブ化、小冊子の発行等、いくつかの活動を進めていくことが提案されました。（内容の詳細につきましては議事録をご覧ください。）

理事会の結果を受けまして、学会発足直後に発行され

ました「32人のインテリア論」と同じように評議員の皆様
様に原稿を執筆していただき、ほぼ同じ趣旨の小冊子を
発行すべく、広報委員会と協力して作業を進めています。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学）

平成29年12月9日（土）に千葉工業大学内にて第2回
広報委員会を実施しました。議題は以下のとおりです。

1. 広報委員の持ち回りで担当する会報編集の進め方。
2. 30周年事業で実施する「私の考えるインテリア論」
刊行の報告。
3. 会報第61号の新企画「インテリア学講座」の主旨報告。
 1. については、今後担当する広報委員の不安に答える
ための質疑応答をしました。担当者は、集まったこと
で来る以前よりは不安が解消されたようでした。

2. については、広報委員会が窓口になって実施する
ことを報告した。

3. については、新しく掲載する「インテリア学講座」
の主旨や掲載号、ページ数について説明し、理解を
いただきました。

つきましては、ここに次号会報第61号より新企画「イン
テリア学講座」を掲載することをご連絡いたします。
この新企画の発端は、会員の顔と名前、所属は知っている
が「その会員の専門分野ってなんだろう。どんな専門
的な仕事をしているのだろう。」と、直接聞いたことが
ない、知らないという事実遭遇したことです。規模の
小さい学会ですからもっと会員相互に情報共有ができれ
ばとの考えで用意しました。大学の研究のみならず、企
業・個人でお仕事している方々でもいいですので、道半
ばの研究やお仕事紹介の場として気軽に活用してくださ
い。寄稿時期は決めて無く随時受付としますので、多
くの寄稿をお待ちしております。掲載会報は例年5月末
発行の春号とします。なお、原稿の基本は見開き2ペー
ジ（5,400文字内で写真・図面・絵も含む）、Wordでお願
いいたします。

寄稿の送付先 jasis.koho@gmail.com 広報委員会

□国際委員会

委員長 ペリー史子（大阪産業大学）

今回はありません。

□論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

本年度の日本インテリア学会論文報告集28号について
は、10月末の応募締め切りまでに32編の投稿がありまし

た。現在、査読をお願いしている段階です。応募してい
ただいた会員の皆様、査読をしていただいた査読委員の
皆様には、厚く御礼申し上げます。今年度の論文投稿件
数は、昨年度の12編に比べて大幅に増加しました。研究
テーマも多岐にわたっており、本学会の領域の広がり
が感じられます。来年度も多くの会員の皆様からの論文投
稿をお待ちしております。

アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIAについ
ては、本学会で審査をして採用となった2編の論文を、
9月に中国のAIDIA事務局に送付いたしました。現在、
AIDIA事務局で編集作業中ですので、近々に発行される
予定です。応募していただいた会員の皆様、査読をして
いただいた査読委員の皆様、AIDIA事務局との連絡と事
務手続きをしていただいた日本インテリア学会事務局の
皆様に御礼申し上げます。

□表彰委員会

高月純子（女子美術大学）

〈インテリア学会卒業作品展について〉

卒業作品展の元々は教育部会の幹事校7校の新宿東京
ガスホールで1992年に各校の教育事情をスライドとパネ
ル等を用いて報告会を行うところから出発しました。建
築系、造形系、家政系などの多ジャンル、高校から大学
院まで多種の学校でインテリアに関する教育は行われま
すが、卒業する際の最後の作品も「卒業設計」「卒業制
作」「卒業発表」等と名称も様々でした。それらをまと
めて『卒業作品展』と呼ぶことにして1993年、広島県で
の第6回学会大会で『第一回卒業作品展』と『教育機関
調査パネル』の報告を行いました。その後教育部会の
「インテリア教育カリキュラムに関する調査研究」の一
環として、定期的にアンケート調査を行い大会等で発信
し、『卒業作品展』も大会時に行うことを継続し、徐々
に毎年恒例の行事として定着してゆきました。2004年
には『日本インテリア学会卒業作品展10年の歩み』とし
て小冊子を発行し、過去の開催地・出展学校名・作品写
真（抜粋）・担当教員による作品解説、学生の傾向、卒
業作品の傾向のコメントを掲載しました。その当時の出
展数は20～30校で、パネルの他に模型・家具も実物展示
を行っておりました。四年ごとの調査企画として2008年
には展覧会と同時に教育機関・企業採用者・卒業生の3
方向を対象としたアンケート調査を実施し「インテリア
教育の現場の方針」「受け入れる就職先の現状」「社会に
出た卒業生の在学時に学んでおきたかったこと」等を教
育部会より報告を行っています。2016年から、卒業作品
展は教育部会から表彰委員会組織の主催となりましたが
現在も引き続き、インテリアを取り巻く社会状況の変遷
を汲みとる一環として、教育機関がどのような教育事情

や目的・方法をもってインテリアをとらえているのかを見る貴重な機会として実施させていただいております。
(卒業作品展の形式の変遷)

展覧会においては模型・家具の実物展示が本来は望ましいのですが、長く継続している中では作品の送付や返却のトラブルや予算と展示の負担があるという意見・体験が多くなりました。負担を軽減するというので、展示面積を一学校で統一し、パネル形式の限定となりました。卒業生が面積に合わせてパネルを作り直すことになり、展示によっては元の卒業作品の再現性は少なくなりましたが、一方のメリットとしては、送付、受領、保管、ある意味での公平性、さらに大会会場以外の地方巡回展への対応がより容易になりました。学会各支部のみなさま、巡回展のご希望を広く募集しております。ご検討いただき表彰委員会までご連絡よろしくお願ひ致します。

また、2007年から卒業生への励みとして賞を設けることとなりました。上から審査して学会賞を授け、頂上を目指させるための目的というよりも、卒業生の励みとキャリアのひとつになる「表彰」という意味で、卒業作品展を次代のインテリア、インテリア学会の人材育成を支える事業と作品展の継続と発展のために今後とも表彰委員会は尽力したいと思います。今後ともご参加、ご協力よろしくお願ひ致します。

■平成29年度支部だより

□北海道支部

支部長 小澤 武 (小澤建築研究室)

今回はありません。

□東北支部

支部長 早野由美恵 (東北芸術工科大学)

東北支部では、11月24日に支部評議員会を東北芸術工科大学で開催しました。当該評議員5名の内、4名の出席(欠席1名から委任状提出あり)により、支部総会の開催日程、場所、見学会などについて審議しました。例年は、東北芸術工科大学(山形市)で行なわれてきた支部総会でしたが、本年度は、杜の都「仙台」で年度内に開催することになりました。開催場所は、前支部長と関係が深い国宝の神社・内陣の見学会、講演会、発表会などを行なう予定しております。

昨年度の東北支部総会では、東京藝大名誉教授の尾登誠一氏の講演会を開催しましたが、その後、同氏が秋

田公立美術大学の大学院教授に就任されたことで、同大学のキャンパスを見学したいという意見もあり、次年度以降に秋田での開催なども計画したいと考えています。

□北陸支部

支部長 棒田邦夫 (金沢学院大学)

今回はありません。

□関東支部

支部長 内田和彦 (岡村製作所)

平成30年第30回大会を下記日程で開催する準備を進めています。わからないことが多く不安も多くありますが支部のみならず、様々な方々のご協力をいただきながら進めていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

開催日:2018年10月20日~21日

会場:千葉工業大学

□東海支部

支部長 河辺伸二 (名古屋工業大学)

2017年11月19日(日)・20日(月)の2日間にわたり、東海支部「秋の高山インテリア見学会」を開催しました。参加者は10名でした。1日目はフィン・ユール邸を見学しました。デンマーク人家具デザイナーで建築家のフィン・ユール氏の生誕100周年にあたる2012年に、高山に建てられました。

2日目は、オークヴィレッジと吉島家住宅を見学しました。1974創設のオークヴィレッジは、木を通して真の循環型ビジネスモデルの確立を目指しています。

吉島家住宅は、1907年に建築され国の重要文化財に指定されています。ご当主吉島休兵衛忠男氏に邸内を案内していただきました。

1日目夕刻に情報交流懇親会を開催し、最新の話に盛り上がり、有意義な時間を共有しました。



フィン・ユール邸と東海支部参加者

一方、10月6日（金）に、当支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会の第21回リレーセミナーで、益田正博氏（安井建築設計事務所）による講演会を、大名古屋ビルディングTOTOプレゼンルームにて開催しました。演題は「和の美意識と精神」で、リゾートトラスト社のエクシブシリーズで初めて本格的に和を取り入れた「エクシブ鳥羽別邸」の設計デザインに関して語っていただきました。多数の参加者があり、貴重な講演会となりました。

□関西支部

支部長 片山勢津子（京都女子大学）
代 理 中村孝之（生活空間研究室）

次回に掲載します。

□中国・四国支部

支部長 谷川大輔（近畿大学）

広島デザインデイズ2017参加

- 主催：日本商環境デザイン協会中国支部
- 参加団体：日本サインデザイン協会中国地区、広島県インテリアコーディネーター協会、中国インテリアプランナー協会、古民家再生協会広島、うらぶくろ商店街振興組合、日本インテリア学会中国四国支部
- 会期：平成29年11月11日（土）12日（日）
- 会場：ニッセイ平和公園ビル1F
- 内容：学生プレゼンテーション、学生デザインコンペ、学生ワークショップ、参加団体のパネル展示、インテリアデザイナー（朝枝春介、松永武）回顧展 ほか

前身の広島デザインウィークから第9回となる「広島デザインデイズ」は、中国地方のインテリア関連の団体、企業、大学等が、デザインを「見る、学ぶ、体験する」ことを身近に感じ楽しく接するイベントとして毎年開催している。今回も、本学会中国四国支部の学生ネットワーク（名称：マンセル）の学生が準備・運営から参画した。

学生プレゼンテーションでは、「平和公園の魅力デザイン」をテーマに5校（近畿大学工学部、広島工業大学、広島女学院大学、安田女子大学、穴吹デザイン専門学校）の混成3チームが、ライティングやサインなどの視点から団体会員へ向けてデザイン提案をした。団体会員からは専門的な視点から幅広く質問や励ましがああり、学生からは団体会員との交流ができ刺激を受けたとの感想が聞かれた。



写真1 学生プレゼンテーション



写真2 学生と団体会員

広島では貴重なインテリア分野のイベントとして始まったこのイベントが、インテリア業界と学生の交流を深め、さらに充実した内容で盛り上がっていくことを願いたい。

（広島デザインデイズ担当：松尾記）

□九州支部

支部長 森永智年（九州女子大学）

旧松本邸見学の催し

今年度の日本インテリア学会29回大会に合わせて、10月21日の午前中に旧松本邸の見学会を九州支部として開催しました。

旧松本邸は、わが国産業界の重鎮・松本健次郎（1870～1963）の旧宅で、大規模な洋館と日本館、数棟の付属室からなる明治後期の典型的な邸宅です。

洋館の設計は、日本近代建築の先駆者・辰野金吾（1854～1919）の主宰する辰野・片岡事務所が当たり、日本館の設計は、洋館の建築監督をした久保田小三郎が行いました。洋館の外観は、絵画的な建築様式をとり、ハーフティンバー風の壁面とアール・ヌーヴォーの細部意匠にその特徴があります。日本館は、唐破風の玄関を持つ書院造りの建物で、大座敷・中央書院の二つの座敷をはじめ多くの居室があります。

あいにく21日は台風21号の接近に伴い、午後から雨の予測ということと、当日が年2回の特別一般公開日にあるため一般客の見学者が午前中に集中することになり、やや混雑した見学会になりました。見学会には、支部から4名と全国の学会員から12名、合計16名が参加して行わ

れました。

国指定重要文化財（洋館・蔵：明治43年（1910）、日本館：明治42年（1909）完成）



■平成29年度研究部会だより

□歴史部会

部会長 河田克博（名古屋工業大学）

今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2017年10月21日（土）に北九州を中心に開催いたしました。見学建物は、現代インテリアや設備に深くかかわるTOTOミュージアム、贅沢な材料と洗練された意匠をみせる近代和風建築の旧蔵内邸の2箇所でした。参加者は42名で、貸切バスはほぼ満杯となり、見学



建物も皆様満足していただいたようで、盛況裡に開催できました。詳しくは、大会報告をご覧ください。

□人間工学部会

部会長 白石光昭（千葉工業大学）

今年度は活動をしておりません。研究会等、何らかの活動をし、皆様にご連絡をしたいと考えています。いつも書かせていただいておりますが、研究会のテーマや部会の活動等にご希望がある方はぜひご連絡ください。よろしく願いいたします。

□教育研究部会

部会長 金子裕行（千葉県立市川工業高等学校）

平成30年2月4日（日）に第2回教育部会を専門学校ICSカレッジオブアーツにて開催いたしました。

午前中は協議会、午後は専門学校ICSカレッジオブアーツの卒業制作展を見学、今年度の目標であった教育部会の主要メンバー5名が決定し、来年度より本格的に活動を開始する旨を確認しました。

□期限付き研究部会

部会長 西出和彦（東京大学）

本年度開始の「2年間の期限付きの研究部会」は、下記3部会が採択されました。

活発な活動を期待します。

記

- ・スマートインテリア研究部会（代表 中村孝之）
- ・住居福祉環境部会（代表 西岡基夫）
- ・ユニバーサルデザイン研究部会（代表 植松暉子）

以上

スマートインテリア研究部会につきましては、次回掲載します。

■平成29年度日本インテリア学会 第2回理事会 議事録

記録 松崎 元（千葉工業大学）

日 時：平成29年10月22日（日）12:15～12:55

会 場：九州女子大学 思静館5階F541室

出席者：直井、加藤、西出、上野、内田、江川、小澤、金子、河田、河辺、小宮、白石、谷川、長山、早野、平田、棒田、松崎、松本（吉）、森永、渡邊 <21名>

中村（関西支部長代理）
上野（弘）（監事）
井上（オブザーバー）

配布資料：

- 1) 平成29年度 第2回 理事会 議事次第
- 2) 平成29年度 第1回 理事・評議員会 議事録
- 3) 平成29年度 総会 議事録
- 4) 入退会者名簿（2017年7月2日～10月22日）
- 5) 論文集・梗概集のアーカイブ化検討委員会（仮称）会議録
- 6) 「スマート・インテリア研究部会」参加募集のご案内

議 事：

1. 開会宣言（白石）
2. 会長挨拶（直井会長）
3. 定足数の確認

本理事会の出席者は25名中21名で、理事会の成立に必要な定足数（過半数：会則17条）を満たしている。なお会の冒頭、上野弘義監事に挨拶をいただいた。

4. 前回議事録の確認（議事進行：白石）
 - ・平成29年度第1回理事会議事録（資料2）を配布し確認の上、資料1の次第に基づいて議事の進行を始めた。
5. 審議事項1：30周年に向けての対応について（白石）
 - ・副会長の上野理事より、30周年に向けて、①島崎元顧問の講演会（会場予約）、②「（仮）インテリア論」、③永年会員への感謝状の発行を考え、進めている旨の報告があった。講演会については、4月10日（土）で検討していることが報告され、進めていくことで了承された。
6. 審議事項2：論文のアーカイブ化について（白石）（資料5）
 - ・小宮理事及び関西支部担当の井上評議員から、資料5を参照しながら、これまで検討してきた内容について報告があった。関西支部では、継続は大事だが、30周年記念事業として企画していることも報告された。
 - ・棒田理事から継続的な管理と将来の運営方法について質問があり、小宮理事より、まずこれまでの30年分についてアーカイブ化し、その後は組織化して運営にあたるとの回答があった。
 - ・直井会長より、進めることに異議はないが、年間の予算を考えれば、今回の費用ではかなり難しいとの意見があった。30周年ということだけでなく、今後は費用の点も考慮しながら、検討を続けていくことで承認された。

7. 審議事項3：入会・退会者について（白石）

- ・松崎理事から、前回理事会以降（2017年7月2日～10月22日）の入退会者氏名と人数が提出され、承認された。
- ・準会員の継続については、年度初めに継続か退会か、正会員に移行するかを問い合わせることが提案され、了承された。
- ・上野理事から、新規入会者を増やすこと、そのためには学会に魅力をもたせることが大切であるとの意見が出された。

8. 審議事項4：インテリア関連団体の連合について（直井会長）

- ・直井会長よりインテリア関連団体の集集体発足に向けた「INTERIOR DESIGN MEETING」の開催にあたり、本学会会員にも参加を依頼する。開催日は、11月16日（木）で、学会ホームページに情報を掲載し、松崎理事が取りまとめて会長に参加者を報告する。

9. その他

- ・次年度大会について、関東支部長の内田理事より、関東支部（千葉工業大学）で開催することが報告された。大会長を直井英雄氏、実行委員長を内田和彦氏が担当する。
- ・事務局（白石）より、AIDIAタイ事務局からの請求について、これまでと異なる請求（参加費1000ドルを2年分）があったため、タイに英文（ペリー国際委員長翻訳）で連絡を行った。10月22日現在返信がないことを報告した。

以上

■事務局からお知らせ

白石光昭（千葉工業大学）

会費の件でお願いがあります。年度末になりましたが、会費の納入をお忘れの方が多少おられます。このお知らせでお気づきになった会員の方は、至急お振込みいただきますよう、お願いいたします。会費収入は学会運営の大事な要素ですので、何卒よろしく願いいたします。なお、お振込みいただいていない方には事務局から直接ご連絡させて頂くこともございますので、よろしく願いいたします。会計関連ですが、現在本年度の研究大会の会計等の整理・確認作業を行っているところです。

最後に、準会員の方々（準会員に推薦された正会員の先生方含む）にお願いです。可能であれば、正会員への変更をして頂き、引き続き学会に参加していただければと思います。やむを得ず、退会される場合は早めにご連絡いただきますようお願い致します。

■ 編集後記

広報委員 小俣祐樹（トランスコスモス）

会報第60号大変遅れてしまいましたが、こうしてお届けすることができました。今回、初めて会報をまとめさせて頂きましたが、原稿執筆者の皆様には、依頼から本日に至るまで、多大なるご迷惑とご心配をおかけいたしました、大変申し訳ございませんでした。この紙面をお借り致しまして、深くお詫び申し上げます。

会報第60号を担当するにあたり広報の仕事を考えてみました。原稿執筆依頼、編集、校閲、発行と文面にするととても単純です。原稿依頼もメールでやりとりさせて頂き、原稿の確認もデータと情報が発達したおかげで、時間的余裕も生まれます。パソコンがない時代は大変だっただろうなと思いつつ、仕事をしておりました。そこで気づいたのです。私、画面しか見ていない、と。

便利になった反面、そこには相手の気配を感じるものの難しさが生まれていました。依頼1つとっても、相手の顔が見えない、私が存じ上げない方への突然の依頼、失礼のない言葉使い、活字による文面など、上げればきりがありません。いかに相手の顔、声、しぐさ、表情を肌で感じること、直筆の温かさで相手の人となりがわかるのが人間の本質だと感じました。インテリアも同じではないでしょうか。発想や創造、デザインなどがますます

す発展し便利になっていきますが、便利になりすぎてしまったが故に、本来もつべき本質が欠けてしまっているものがあるのではないのでしょうか。

では、インテリア学会における広報委員の本質とは何か。学会として活動した事実を原稿執筆者へ原稿を依頼し、お預かりした原稿を会員の皆様へしっかりお伝えすることだと思えます。会報のページに限りがございますが、今回感じたことを広報委員全員で共有し、次へ活かして参ります。まだまだ新スタッフの編集が続きますが、皆様の温かいご支援とご鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。

■日本インテリア学会会報第60号（2018. 2. 28発行）

編集者： 棒田邦夫、小俣祐樹

発行者： 直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会： 棒田邦夫（委員長）

西岡基夫、井上貴司、清水隆宏、

松尾兆郎、小俣祐樹

電話・FAX：076-229-8884

e-mail：jasis.koho@gmail.com

■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 白石研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp